

地質 52

## 太古の地球を物語る「化石」

地質担当 多久島 徹

## 化石はキセキ

化石は太古の生物の遺骸が砂や泥などの中に埋められ、地層の中に残されたものです。生物の遺骸のほとんどは他の動物に食べられたり、分解されたりするため、死後すぐに砂や泥に覆われなければ化石にはなりません。さらに、砂や泥などは海底や湖底などで堆積するため、それらの地層が隆起して陸になり、地層が侵食されて削られなければ、私たちは化石を見つけ出すことはできません。

今、私たちの目の前にある化石は、何万年、何億年という長い年月の地球の営みの中で、いくつもの偶然が重なり合っただけです。

まさに、地球が生み出した「キセキ」の産物なのです。



## 化石にはどんなものがあるのだろう

化石には、そのでき方から、大きく2つのタイプがあります。

## ① 遺体化石

生物のからだの全部または一部がそのまま残されたり、鉱物に置きかえられたりして化石になったもの（体化石）や生物の遺体が保存されず、その形が型となって保存されているもの（印象化石）があります。

例：貝、骨、植物の葉など

## ② 生痕化石

生物の生活のあとが残されたり、鉱物に置きかえられたりして化石になったものです。

例：足跡、巣穴、排泄物（フンなど）

骨や貝などの遺体化石は、生物が死んだ後に別の場所に流されてしまったりすることがありますが、足跡や巣穴などの生痕化石は、かつてその場所で、生物が生活していたことを物語っています。



ズーフィコス化石（生痕化石）のレプリカ  
屋久島町産

## 鹿児島にもクビナガリュウがいた！

## ーサツマウツノミヤリュウー

平成16（2004）年2月、長島町（当時は東町）の獅子島で、クビナガリュウの化石が発見されました。クビナガリュウの仲間は、日本でも比較的多く見つかっていますが、九州ではこの化石が初めてです。

クビナガリュウは、海にすむ大型の爬虫類で、首の長いタイプや短いタイプなどいろいろな仲間がいます。調査の結果、この化石は全長の半分もある長い首をもっているエラスモサウルスの仲間であることがわかりました。

また、一緒に発掘されたアンモナイトの化石などから、この化石の産出年代は白亜紀後期（約9800万年前）と推定され、現在、東アジアで最古のクビナガリュウの化石とされています。

鹿児島で発見されたこのクビナガリュウは、鹿児島県の地名「薩摩」と発見者の宇都宮聡氏の名前から、「サツマウツノミヤリュウ」と呼ばれています。



アンモナイトの化石（印象化石）長島町獅子島産



サツマウツノミヤリュウの下顎部